Iターン

森 一紘（56）

NPO法人やまなみ大学 理事長
アーティスト、デザイナー（店舗設計、グラフィック）

移住は、『移民』だと思う。

もり・いっこう
1959年生まれ。店舗設計、Graphic Designを生業とする傍ら、これまでの田舎暮らしで受けた恩恵を還元したいとNPO法人やまなみ大学に参加。現在、理事長。まだインターネットも普及していない時代に田舎暮らしに挑んだパイオニア。

デザイン事務所など経て29歳で独立。寝る間も惜しんで働いて業績も急成長を続けていたが、気づけば心も体もボロボロになっていた。心身のバランスを取るよう、気づけば『自然に囲まれた環境』を求め、週末は郊外で過ごすようになる。折しも時はインターネット黎明期、田舎に居ながらも都会の仕事ができる可能性に気づき、土地探しを始めた。

移住へのいきさつ

当時は、空き家バンクはおろか行政のホームページもない頃、まずは近郊の市町に手紙を送ることからはじめ、返信のあったところを訪ね歩き、候補地を絞っていった。その中の一つ美土里町の自然林の豊かな風景が気に入り、町の広報紙を通じ土地を譲ってくれる方を募った。はじめから土地を購入するつもりだったのは、そうしないと「自分は逃げるかもしれない」と思ったからだ。その後、地域の方々と関係を作るため週末ごとにキャンプに通い、名刺代わりに作った小冊子を配り歩くという努力を行ったものの、なかなかいい話に巡り合えなかった。

手がけた作品の数々。作風もここに来てからおのずと変わってきたという。

森さん自ら設計した家。仕事場に飾ってあるミニチュア模型や、玄関先で出迎えてくれるインパクト大のロボットも森さん自身が手がけたもの。

そうこうしている間に4年の月日が経ち、半ば諦めかけた頃、最後にもう一度行政に相談に行き、再度広報紙に掲載してもらうことになった。するとそれを見た地元の方から「土地を見に来ないか？」と連絡があった。さっそく会いに行くと「あんたのことはずっと知っとって気にしてた。できれば集落の誰かが『譲ってもええ』と申し出てくれることを期待しとったんじゃが、だれも出んかったことがワシは恥ずかしいよ。よかったらウチの土地を譲ろう」。声の主は地元の議員さんだった。

すすめられた土地は集落の一番奥、イメージ通りの場所だった。その日の内に話がまとまり、手続きにじっくり一年、整地・新築に二年、土地探しから足掛け7年目にしてようやく思い描いた暮らしがスタートした。

集落との付き合い

土地を譲ってくれた方と最初の内によく話し合い、程よく距離を置いた付き合い方ができるよう便宜を図ってもらった。しかし、どんな人が入ってきたのか、地元の人は興味があるもの。その辺りを汲んで、引っ越し時にオープンハウスを開き、地域の皆さんを招いて自分たちのことを理解してもらう機会を作った。その後子供の成長に沿ってPTAや子ども会などに参加し、自然になじむことができた。

20年目の今年初めて、回覧板の取り纏め係が回ってきている。

移住して良かった？

「住むところは大事ですよ。私のようなクリエーターの場合特に…。パソコンのモニターにへばりついて仕事をしていて、ふと目を挙げた瞬間に見える景色がビルなのか、森なのか。その空気感に刺激されて発想が生まれるからね。見渡す限り緑豊かなパノラマの中で仕事ができて、子育てができるっていう環境は贅沢そのものです」。

これからの移住者へ

「移住って言うと『引っ越し』とか『住み替え』くらいに思っている人もいると思うけど、違うよね。むしろ『移民』と思うくらいの方がいい。移民って現地に行ってから苦労する話が多いでしょ？　勧誘する側は甘い言葉で誘ってくるけど、いざ行ってみると地獄のようでだまされたみたいな…（笑）。でもそこの土地で生きていくという覚悟がなければ結局定着できないし、逆に腹が決まっていれば地域の人も認めてくれる。それくらいの覚悟が必要だよね」。

田舎暮らしパイオニア世代の苦労を思うと、これからのアキタカターンズは恵まれているように思う。